



2014.7.1

7月ようちえんだより

西神戸YMCA幼稚園

5歳の子どもに十分な食事を与えず死亡させ、放置していた父親が逮捕された事件がありました。小学校入学時に登校させず、居住不明者とされたまま7年間も放置されていた結果の発見でした。親がわが子に十分な食事を与えない育児放棄、また暴力を加えての事件等の報道がなされるたびに、子どもへの愛情や子育ては、人間の本能ではないということを突きつけられます。このような子育てにまつわる様々な虐待があるわけですが、明らかに事件として取り上げられる虐待もあれば、親が無意識のうちに、ある時には良かれと思ってわが子に接している中で虐待があることも忘れてはならないでしょう。

そのような中で親にとって一番理解しにくいのは、「教育という名の虐待」であるかも知れません。子どもにより高い教育を与え、より高い学歴を得させることが、子どもの将来のためになると信じて、早い時期から様々な学習を強いる親に、虐待という意識はほとんど無いのかも知れません。しかしこれなども、子どもの気持ちを無視して、親の望む進学を子どもに押し付けている虐待であるかも知れないことを、親は理解しなければならないでしょう。親がなすべきことは、子どもに勉強を強いることではなく、子ども自身の「勉強したい」という気持ちを育むことなのですが、親にとってはこの違いを理解することは難しいようです。また、これは絵を描くこと等とも同じ様に思えます。子どもに、「絵を描きたい」という気持ちが無いときに、「こんな絵を描きなさい」「上手に絵を描きなさい」と絵を描くことを強いられるのであれば、絵を描くことそのものが楽しいものではなく、苦痛にもなるでしょう。一番大切なことは、自分もやってみたい、出来るようになりたいという気持ちが育まれる時期に、強いられるのではなく、また他と比較されるのではなく、上手下手ではなく、そのことを楽しみ、子ども自身が興味を広げていくことなのです。早期教育と言われるように、様々な課題が大人から与えられ、それに答えて評価を受けることが、幼児期からどんどん増えていっていますが、外からの評価ではなく、自分自身でやってみて「これでよし」と思えるような体験が幼児期には一番必要なのです。

子ども自身が親や他の大人から、愛されている、信頼されていると実感しつつ、自分自身の判断や行動に責任を持てる者として成長することを祈っています。

「私は、家庭は家族と一緒に生活する場であって、教育の場ではないと考えています。(中略)一緒に生活することで身につける知恵や知識や技術はたくさんあるでしょうが、その多くは無意図的であり、結果として教育になっているのです。(中略)親としては子どものためにも思い教育するのですが、子どもが親に求めるものは教育ではないのです。子どもにとって一番うれしいことは、親と一緒にいてうれしい、楽しいと感じることです。そして、子どもが話しかけてきたときに快く耳を傾けて聞いてくれることです。」
(「ひきこもる小さな哲学者たちへ」小柳晴生)

7月主題 「やってみる」

聖句 “子供たちを私のところに来させなさい。”